捕獲大作戦 1

Yuriko & Keigo

丹羽庭子

Niwako Niwa

エタニティ文庫

目次

捕獲大作戦1　5
捕食大作戦　315
書き下ろし番外編
そこのところ、覚悟はよろしいか　345

捕獲大作戦１

ふ-じょし【腐女子】
ＢＬ（ボーイズラブ）、やおい、薔薇など、男同士の恋愛を扱った漫画や小説を、こよなく愛する女性のこと。婦女子のもじり。

二次元の男×男の恋愛模様に萌え、同人誌制作・購入などでエネルギーを充填する彼女達の普段の姿は、ごくごく普通の女の子。本性をひた隠しにし、学校、会社、そこかしこにひっそりと生息しているのです。
そう、あなたの周りにも――

1

上司と部下のイケナイ関係……萌えですなー！
乱雑に書類が積まれた机の隙間から、私はずり下がる眼鏡を押し上げて、こっそりと二人を眺めた。
カチョー――袴田圭吾、三十一歳、バツイチ独身。二ヶ月前まで課長代理だったけど、先月から正式に課長となった若きエリート。カチョーは大人の魅力がムンムンで、元奥さんに昔の男と逃げられたらしいっていう噂がまず信じられないハイスペックなお方。
清水センパイ――清水博之、二十七歳、独身。次期係長候補の筆頭！　こちらも将来有望株のイケメンだー！
誰にも見られないよう背後を気にしつつ、談笑する二人の姿をメモ用紙の片隅に描く。ああ、堪らんですよ、この二人が……っ！　くううう～。
私はカチョーと清水センパイの二人をモデルに、めくるめく愛の世界を漫画にし、同人誌即売会やサイトにて絶賛販売中。
私は世間でいうところの『腐女子』である。ＢＬが大好物の、滝浪ユリ子二十二歳、

新入社員。三度のメシよりＢＬが好き、をモットーに生きている。

女子として必要な要素――ファッションやメイクは、守るべき最低限のラインである「清潔さ」を失わないように気遣っているので、腐女子……とはバレていないはず。

それにしても、就職試験の面接官だったカチョーを初めて見た時は衝撃を受けましたね。「これぞ理想のＳ彼氏！」って。きっと言葉でも体でも、技巧を尽くして相手を陥落させているに違いないですよ。

この会社はステキ男子がたくさんいるから、まさにパラダイス。創作意欲が湧くってもんだよ！

社内恋愛のカップルも何組か見受けられる。

係長候補の清水センパイ、それからマメ橋……もとい高橋センパイも職場ラブですね？　皆さん内緒にしてるつもりみたいですが、私は知ってますよ。どうして私が、こと他人の恋愛事情に聡いのか？　ふふーん、腐女子の観察力をなめてもらっちゃ困ります。

……ただ悲しいかな、私自身は彼氏いない歴イコール年齢という現実。というか、よくあるこの腐女子のテンプレがリアルに使えてしまうのも如何なものでしょーか。

恋の一つも芽生える思春期黄金時代に、ある漫画に出会ってしまったのが運命のツキでした。

それはＢＬといわれる、男同士の恋愛模様を描いた漫画や小説との出会いだったのです。以来私は、西に即売会があれば小遣いとバイト代をつぎこみ、東にオフ会があれば予定最優先で参加。充実していた我が青春！

ま、そんな訳で、彼氏を作る暇などまったくなし。したがって、Ｈなシーンはイメージで描くか、または絡みナシで描いているんですが……最近、ちょっとばかり悩みがあるんデス。「貴女の漫画には、ちっともリアリティがない！」と読者さんからコメントを貰いまして……アイタタ、バレてますよ世間の方々に、私がエロエロを知らんってことがね！　ああ、どうしたものか。

「滝浪さん、例の資料はどこかな？」

「あ、ハイ。こちらにありまっす！」

終業間近カチョーに言われ、私は角型０号サイズの茶封筒を取り出した。明日取引先の会社へ持って行くために、資料を揃えて入れておいたのだ。

封筒を受け取ったカチョーは中身を確認し……

「なんだこれは？」

「え？　ひ、ひゃぁぁぁぁっ!?」

カチョーが手にしているもの、それは……私の趣味がモリモリに詰まったＢＬ漫画原

稿。所属するサークル『ＢＡＲＡ☆たいむ』に送るはずの封筒を、間違えてカチョーに渡しちゃった！

一旦手にした原稿を封筒に戻したカチョーはひと言。

「……滝浪さん？　会議室まで来てくれるかな」

「……はいぃ」

死刑宣告のような冷たい声に逆らえるはずもなく、私はトボトボとカチョーの後についていった。

会議室、といっても十人ほどが入れるくらいの小部屋。カチョーはパチパチッと電気のスイッチを押し、私には椅子へ座れと促したけれど、自分は行儀悪くも机に軽く腰かけた。

こんな状況なのに、「あー、その姿、様になるなー」なんてジックリ観察しちゃったよ。カチョーはさっきの封筒からふたたび中身を取り出し、私の力作である原稿をパラパラとめくる。

――くっ、何の羞恥プレイなのですかっ！

「この漫画、登場人物の名前に見覚えがあるのは気のせいか？」

うぐっ、気づかれましたかっ！

読み終えたらしいカチョーは、トントンと原稿を揃えて封筒にしまった。そして、腕を組んで私をとくと眺める。

「さ、さあ？　気のせいじゃありませんか？」

「袴田、清水……課長と係長……三十一のバツイチと二十七の……」

しらばっくれてみたものの、カチョーが漫画の設定をそらんじて読み上げるから、恐怖で慄いた。

「あの……えーと……見なかったことには……」

ギロッとひと睨み。

「ああそうですよね、ハイ。なりませんよね、すみませんっ！」

シュンと肩を落とす。――終わったな、私。

上司達をモデルにコテコテなＢＬ描いちゃ、場合によっては自己都合退職ですよね。そうなったら、これからの活動資金をどこから捻りだしたらいいんでしょーか!?

「このように私をそのまま投影したかのような創作は非常に気分が悪い。実際の私は至って健全な趣味を持ち、当然男にはまったく興味がないからな」

「はい、そうですよね……」

「これを世に出すつもりだったのか？」

「えー、えっと……これは趣味を同じくする者が集まってサークルを作り、同人誌とい

う自費出版物を作り上げ、んーと、即売会なんかで手売りをしたり通販したり……ああ、でもこの手の漫画は腐女子が好んで読むものであり、そこまで……」

「ふじょし？」

「つまり……男性同士の恋愛が堪らなく好みな女子達です。BLの同人誌を買う人自体〝そんなに〟いるわけじゃないし、私の所属するサークルも〝そんなに〟有名ではないし、世に出回る部数も大したことがないから、なんと言うか……」

最後はゴニョゴニョと口ごもる。そう、大したことはない。私のは、あまり……いっ、いいんだよ、好きでやってるんだからっ！

カチョーは一つ溜息を零し、原稿が入った封筒で机をコンコンとノックするように叩く。

「この件に関して、本来ならば重役会議にかけた上で処分を決定するものだが……。私としては自分がモデルとなっているこの漫画を、お偉いさん方に見せる勇気はない。よってこの件は、私の胸に収めておく」

「え！　いいんですかっ!?」

まさかの不問？

「まだだ、最後まで聞け。それには『三つの条件』があるが、のめるか？」

「『三つの条件』？　何ですかソレ」

「のむと約束できるまで言わない。のむか、それともものまないのか？」

それ、二択のフリして一択ですよ？　拒否権ないじゃないですか！　そんなご無体なっ！　……いや、まてよ？

カチョーは確かにSキャラだけど、普段は紳士だし？　だから私、『三つの条件』というのがどんな内容なのか気になりつつも、あまり深く考えずに頷いたのデシタ。

「すまん、待たせた」

ここはとある喫茶店で、時刻は午後七時。私は定時上がりだったけど、カチョーの残業を待っていたらこの時間になった。それでもかなり早い方らしいけどさ。

あのおっそろしー『三つの条件』の詳細を聞くために、カチョーと社外で待ち合わせたのだ。うう……どんな要求をされるのかな。はっ！　まさかあの漫画のカップリングに文句があるとか!?　清水センパイじゃ萎えるとか!?　実は本命はマメ橋センパイだとか!?　奉仕キャラが好みですかカチョー！　そっちルートでしたかカチョー！　それはそれでアリですな！　とネタ帳に書き付けようとしていたら、ピンッとオデコを指で弾かれた。

「痛っ！　何するんですか！」

「お前いま、話聞いてなかっただろ。いいか、その腐った耳でよく聞け」

わーん、何気に失礼！
「まず一つ目の条件。お前のその時代錯誤な見た目をすべて変えろ」
「え、えええっ!?」
「今時どこで売ってるのか探すのも大変な、ガラス製の太枠黒縁眼鏡。梳いた形跡の見当たらない重たい髪を真ん中分けにし、かつ二つ縛りにした昭和な髪型。そして化粧っけゼロの顔。彩りが一つもなく、可哀相にすら思えるその残念な服装。どれもこれも最初から気に食わなかったんだ。変えろ」
ちょ、私をまるっと全否定!?　ナチュラル志向と言ってください！
猛然と抗議したものの、カチョーは「これが条件その一、わかったな」と譲らず。くっそー、パワハラだぁぁ！
私の反論を何事もなかったかのように聞き流したカチョーは、続けて二つ目を切り出す。
「条件その二、私の家に住み込み、家事全般をやること」
「ちょ……住み込むってことは囲われ――！　ぐむむ」
「阿呆！　人聞きの悪いことを言うな！」
慌てて私の口を塞ぐカチョー。ええー、だって住み込むだなんて、そんなぁぁ。
「いいか、腐った意識を現実に戻せ！」

と、脳内で妄想が暴走しがちな私を理解した（？）カチョーは、鋭い視線で私をギッチギチに縛りながら、ようやく口から手を離してくれた。っていうか、カチョーの手は大きくて硬いんですね。いい手です。これをアレすれば萌えますね。それでもって、こう……
「言ったそばからこれか！」
「イダダダダッ！」
カチョー酷いです！　耳、引っ張らないで。私の耳はそんなに伸びませんて！　あまりの痛さにじんわりと涙が出ちゃったよ、もうっ！　耳をさすりながら、視線に抗議を込めてカチョーを見たら、敵はどこか少し怯んだ様子だった。
「とにかく話を聞け！　住み込みで家政婦をする期限は一ヶ月と定める。理由はお前も知っているだろう？　私は今、独り身であり、残業続きのため家事まで手が回らず、非常に困っているからだ」
「ああ、奥さんに逃げられ……イタタタッ！　は、はい。そうデスね、そうデスね！」
「一ヶ月後に……大切な客が来るんだ。それなりの部屋にして迎えるには、人手がいる。だからちょうどいいかと思ってな」
「えー、家事代行サービスを使えばいいじゃないですか」
「却下」

即答デスかっ！

「まあ、ちょうどいいタイミングで、お前が条件をのむと言ってくれたから、任せることにした」

のむっていうか、のまされましたケドね！

注文した紅茶はとっくに飲み終えている。水滴がびっちょりついたグラスを掴み、水を一口飲んで、はああっと、これみよがしに溜息を吐いた。

「だけど、なんで住み込みなんですか？」

「簡単。通勤の時間が省けるからだ。時間のあるかぎり、目一杯働け」

「暴君め！」

なんてこったい、どんだけ散らかしたんだカチョー！

2

「研修のため、一ヶ月合宿をすることになりました」

って家族には伝えました。私は実家暮らしなので、時には嘘も必要なんです。カチョーのサインが入ったそれっぽい書類を見せたら、家族はアッサリ納得してくれました……

ほんとカチョーって、私の見立て通りのSキャラで俺様です。こんなの当たっても嬉しくないやい、妄想だからこそ楽しいキャラクターなんだい！

コミケやオフ会参加のために持っていた、無駄にでかいキャスター付きのスーツケースをゴロゴロと引きずりながら辿り着いたのは、一戸建ての立派なおうちでした。

――で、でか！

駅前の繁華街に程近く、それでいて閑静な住宅街。会社まで、徒歩で二十分かからないかも。カチョーの長いおみ足ならば、十分もあれば着いてしまうでしょーね。

そんなカチョーのおうちの玄関の前に、私は今、佇んでいる。例の取り引きから数日経った土曜日。本日から一ヶ月、ワタクシこちらに住み込むことになりました。トホホ。何風だかよくわからないけど、とにかくオサレな玄関の表札を見れば間違いなくカチョー宅ですね。袴田って書いてあるしね。間違いないですね。

……回れ右して帰りたいよマミー！　しかしここで帰ったら私の原稿がぁぁっ！　そう、あの原稿はカチョーに没収されてしまったのだった。生活指導の先生かっ！　幸い、締め切りにはうんと余裕を持っていたから、一ヶ月後の提出期限には間に合うだろう。つい筆が進んで早めに描き上げたのが幸いしたというか何というか……いや、そもそもそれが原因でこうなった訳であり……

ゴッ。

「いったあああああああ」
「遅い」
「ちょっとぉぉ！　いきなりドアを開けるだなんて酷いじゃないデスか！」
「早く入れ、そして仕事しろ」
人の話聞けって、昨日おっしゃってませんでしたかカチョー！
いやいや、それにしても。休日のカチョーは何というか、ＴＨＥ☆色男デスねっ！　眼福デスねっ！　……これが妄想の中だけなら最高なんですけどねぇ。仕事中のカチョーは、スーツをバリッと着こなし、髪は綺麗に整えられ、靴だってぴかぴかに輝いて、どこをとっても一流の男性スタイル。でもって、オフモードは大人の余裕を感じさせつつ、それでいて少し隙のあるような……
ハッと気づいたら、目の前にデコピン発射一秒前の指がありました！　慌ててうしろに下がり、オデコをガードしましたよ！　危ない危ない。
「妄想に耽るのも結構だが、時と場所を選べ」
「は、はひっ！　失礼致しました～」
カチョーの先導でお邪魔しましたお宅の中は、まだ新しい匂いがした。広々とした玄関、上がり框は低く、造りつけの飾り棚があって。どれをとってもオサレで、ほおおっと見惚れてしまった……って、あれ？　まだ玄関しか見てないけど、変なニオイはない

し家の中キレイみたいですけど？　と不審に思いつつ、カチョーに案内されて二階へ上がり、カチョーがドアを開けた階段すぐ横の部屋を覗く。
「一ヶ月、この部屋で寝起きしてもらう」
そこは八畳ほどの洋間で、ベランダへと続く掃出し窓と出窓が付いていて、とても日当たりがいい。客用と思われる布団一式と、小さな折り畳みテーブルが片隅に置かれていた。
――あ、あれ？　なんか待遇いいっすね？　私のイメージでは階段下とか物置とか……暗い部屋でひっそりと過ごすのかと思ってましたよ。なんてったって専属メイドですからね！
カチョーは腕時計を見て、「あぁ」と声を洩らした。
「もうこんな時間か。今日は条件その一をクリアしてもらおう。行くぞ」
「えええ、どこへっ？」
「……トリミング」
「？」
「――着いたぞ、降りろ」
言われるがままシートベルトを外し、降り立ったそこは、なんともセレブ臭の漂う店

構えの美容室。私はまだ見たことありませんが、カリスマ美容師というものが生息していそうだよ。

カチョーは私のことなどお構いなしに、慣れた動作で店のドアを開ける。うをぅっ！こっちはまだ心の準備が！

すると、「お待ちしておりました、袴田様。ご来店ありがとうございます――そちらの方が、ご予約時におっしゃっていらした……？」との声が。

「ああ、よろしく頼むよ、店長。見られる髪型にしてくれ」

「かしこまりました」

そしてカチョーは、私の首根っこを捕まえて店長に引き渡した。ペ、ペット扱い!?

「袴田様、お待たせいたしました。仕上がりのご確認をお願いします」

トリミングされた私はふたたび、カチョーの手に戻されました。

――ちょ、髪を縛れる方が楽なんデスよ！　切らないでぇぇ！

――「条件その一」、そう伺っております。

――ぎょええ！

死闘の末に完成した姿を鏡で見て、私の心臓は飛び上がりましたね！　誰よコレ！

「ふむ。大分マシになったな」

「かっかっかっ……かちょぉぉぉ……」

なんとびっくり、鏡の前の私はステキ女子風に仕上がっている。どうやったらこんなサラサラな『風を弄(もてあそ)びヘアー』になるんですかね？

そういえば、こういう髪型は受けのタイプに多い。逆に攻めタイプにはモチロン、黒髪短髪の硬派な感じがよろしくて――

ベチッ！

「いったーーーーーーぃ!!」

「次行くぞ、阿呆」

くっ！　折角いい波が来てたのに！　またもやデコピンされて、どうやらまたどこかに連れて行かれるらしい。私は売られた仔牛のように、荷馬車もといカチョーの車に揺られて行く……ううう。

そして――

「が、眼科？」

「保険証、持ってるだろ。出せ」

着いた先は何故か眼科。もういいですケドね。逆らったところで敵いませんから、今さらとやかく言いませんが……一体ワタクシめはここで何をされるのでしょーか。

先に長椅子へ私を座らせ、受付を済ませたカチョーは私の隣に腰をおろした。

――なんだろ、この扱いは！　まるで保護者に連れられてきた子供みたいじゃないのさ。

何人か先に待っているので、当分は私の順番にならない。待合室にあるテレビをぼんやりと見ていて、ふと思い出した。

「カチョー、三つ目の条件って何ですか？」

二つの条件はもう聞いた。でも、あまりの傍若無人っぷりに慄くあまり、三つ目を聞きそびれていたのだ。そりゃー聞くのはおっかない。けれど、知らずに過ごすのは、後々もっと怖いことになりそうですよ！

「三つ目、か」

うっ……その口の端をニヤリと上げて笑うの、オッソロシーよカチョー！

「それは……そうだな、一ヶ月後に言う」

まさかの時間差攻撃！　流石ですね、流石はSキャラですね。私を掌の上で転がすことなど朝飯前ですか。くっそー、うまいこと弄ばれてますよっ！

とはいえ一ヶ月後、メイド苦行が終わるその時にって、なんでだろう？

「滝浪さーん、お待たせしました」

この状況から目一杯想像力を膨らませ、頭の中で『俺様上司に放置される部下男子』というシチュエーションで妄想を展開しようとしていたその時、診察の呼び出しがかかってしまった。むおー、タイミング悪すぎ！　メモらせてぇぇ。

診察室へ向かう私に、何故かカチョーまでついて来る。

「か、かちょお？」

「いいから」

――いいからって、ナンデスカ？

とにかく二人で診察室に入ると、中には白衣に身を包んだ謎の美女が待ち構えていた……って、単に女医さんがいただけなんだけどねっ！

看護師さんに案内され、診察机の横の椅子にちょこんと座る。

「あら、久し振りね？」

「ああ」

私を見て、それからカチョーを見た女医さんは口角をくっと上げた――二人はお知り合いでしたか！　おそらく三十代前半の知的な雰囲気の美女で、シルバーフレームのオサレ眼鏡がとてもお似合いです。

「あなた……こんなチンチクリンとつきあってるの？　それともペット？」

い、い、い、イマドキそんな、チンチクリンなんて言う人いるんだ!?　っていうか口悪いーっ！　それはさておきペット扱いはその通りですよ。なんせトリミングされ

ちゃいましたからねっ、と言ってやろうかと口をパクパクしてたら、カチョーが私の頭をポコンとグーで小突いた。

しかしカチョーは私には目もくれず、不機嫌そうに女医さんに言う。

「俺のことはいいから、早く診ろ」

ていうかカ、カチョーが「俺」って言いましたよっ！　俺？　俺!?　俺様キャラが言うと、ホントばっちり似合いますねー、って萌えてる場合じゃないよ私！

「ほら、こっち向いて。トロトロしてないで、速やかに顎をここに乗せなさいよ」

ひぇぇぇぇ、この女医さんもSデシタか！

私は前門の虎、後門の狼という状況で抵抗などできるはずもなく、ただ黙って眼鏡を外し、なんだかよくわからない医療機器の上に顎を乗せた。

それにしても、このシチュ使えそうです。知的イケメン医師が、暗い密室で患者を言葉責めデスよ。シルバーフレームの眼鏡をゆっくりと外しながら、患者の顎に手をかけ……

ゴスッ！

「んぎゃっ！」

「顔に出てる、顔に」

カチョーの裏拳が私の頭に落ちてきたでありマスよっ！　キ、キビチー！

右目、左目を調べ、何事かカルテに書きつけたS女医は、私を不躾な視線でじーろじーろと嘗め回した末、傍らで見守っていたカチョーを見てニヤニヤ笑った。

「袴田君、やっとなの？」

「……まあな」

挑戦的に見上げるS女医の視線と、挑発的に見下ろすカチョーの視線がっ……視線がぁぁっ！　ひ、火花が見えますよーー！　誰か、誰かぁぁぁ！　間に挟まれている私を助けてぇぇ！

しかし戦いは一瞬で収束した。S女医がふい、と視線を逸らしたのだ。

「その話はまたいつか聞かせて。じゃ後は視力を測って、装着の仕方を習っておしまいよ」

じゃあね、とS女医は机に向かって仕事を始めた。もうこれ以上は話す気がなさそうで、机上の書類を見たまま、左手をこちらに向けてヒラヒラと振った。

「世話になった」

カチョーは女医サマを振り返りもせず、診察室を出た。い、いいの？

どうやらカチョーは、私のコンタクトレンズを作るためにここへ連れて来たようだ。初心者だから、一日使い捨てタイプのソフトレンズ。

むおっ、なんだこの柔らかい物体は。まるでクラゲを相手にしているかのようなっ!?慣れない……。目の中にウロコを入れて、よく平気だな、みんな。おぉぉ、目がショボ

ショボするぅ！

私が装着の説明を受けている間、カチョーは外で待っていた。

「か、かちょお。終わりマシタ……」

ヨロヨロと辿りつけば、カチョーは何故か、じいいっと私を見る。

——ん？　へ、変なのデスカ!?

ひょっとしてコンタクトの表と裏、間違えたかな？（んなこたない）

「似合うぞ」

えっ。褒められた——のですか？

カチョーはふんわりと柔らかく笑い、私の肩をぽんぽんと叩いて、受付カウンターへ向かった。

そんなカチョーの表情に、嬉しいようなくすぐったいような、初めて抱く感情で胸がきゅうっと締めつけられた。

次にやって来たのは、デパートメントストア！（正式名称）

キラッキラと眩しいですね、デッカイですね！

デパートの駐車場に車を停めると思いきや、裏口に回りまして……んなっ!?

「お待ちしておりました。袴田様、どうぞこちらへ」

「車を頼む」

「かしこまりました」と、うしろに控えた人が運転交代ですよっ！　なにこのおセレブ待遇！

車から降りたカチョーと私は、執事ちっくな案内人に先導されて歩き出す。えー、えー、ここで何するんですかカチョー！　はっ、まさかここで執事プレイ、主従関係でＧＯデスか？　ナルホドそう来ましたか。

「お電話でお伺いしたのは、そちらのお嬢様の件で？」

「そうだ、よろしく頼む」

またしても引き渡されたーっ！　私、何されるんデスかカチョーォォォッ！

——ってことで、ここはデパートの最上階。

ちょ、ここ、関係者以外は立ち入り禁止区域っぽくないですか？　やけにハデハデで、セレブリティがご利用になりそうな雰囲気です。

「ここ、どこなんですか……」

アマゾネスもとい、ガードマンのように屈強な女性スタッフに両腕を抱えられて連行されていく私は、とっくに戦意など喪失してマス。さっき応対してくれた男性はスマートな紳士って感じだったのに、どうしてここの女性陣はこんな怖そうなのでしょうか。

どうせなら可愛い侍女風がよかったです！　とか思いながら力なく疑問を口に出せば、右側のアマゾネスが答えてくれた。
「ここはＶＩＰ専用ルームでございます」
「デパート内の各部門の最高峰を集めた特別室です」
と、メイクが完璧すぎる左側のアマゾネスも答えてくれる。
「袴田様、こちらでしばらくお待ち下さい」
「ああ」
かかかかちょお？　カチョーはひと座りするだけでお金を取られそうな重厚なソファにゆったりと腰を下ろし、長ーい脚を組んで、私に向かって軽く手を振り、目を細めた。
「行ってこい」
カチョーーッ！　私には、私には「逝ってこい」と聞こえましたよぉぉぉ!!
ふたたびがっしりと両腕を押さえられ、試着室へと連れて行かれマシタ……

——ちょ！　わ！　やめてえええ！
——激安量販店で三年前に買ったような服は早く脱いで下さい。
——何故それをぉぉぉ！
——あらっ、このブラ、糸がほつれてる！　おまけに上下バラバラなんて信じられない!!

——ごめんなさいぃーー！
しかもデスよ？　カチョーがすぐ近くにいるというのに、採寸された数字を大声で読み上げられてしまいました！
——身長一五二センチだけど……すごいわ、バスト七十のＤ？
——声！　声出てマス！
——お椀型だし、キュッと締まってるし、プリンとしてるし！
——いぃぃやぁぁーー！
なんという羞恥プレイ！　個人情報保護法はどこいった！　事細かに体中を採寸され、あれよあれよという間に、高そうな下着で体を補正されつつ装着（しかも上下お揃いデス！）、ナウなヤングにバカウケ必至でステキ女子ウフフな服を着せられ、アマゾネスから化粧の指導を受けた。
ようやくすべてが終わった。
初心者向け六センチヒールのパンプスを履き、フラフラしながらドアを開け、カチョーのいるソファに近づいた。
「か、かちょぉぉぉ」

「……」

半泣きの私を見るとカチョーは黙って立ち上がり、ワタクシめの手を取りソファへとエスコートしてくれた。

そして……あれ？　あ、あれれ？　ななな何？　手、放して下さいよ！　ちょ、指、ゆびゆび、絡めないでぇぇ！

カチョーは私の手を握り、指を絡めたままソファに座るので、必然的に私も隣に座ることになった。その距離感もアレだけど、カチョーの目線が私から外れないので非常に困る……逃げたい度ＭＡＸ！

「では、こちらの書面にサインをお願いします」

執事(仮)が、高級そうなカップに入ったコーヒーと書類を運んできて、そしてカチョーにペンを渡した。カチョーが書類にサラサラとサインを書きつけている間、私はやっとカチョーの視線から逃れることができた。ホッとして、絡められた手とは反対側の自由が利く手でコーヒーを一口啜った。しかし。それにしても。私の手をすっぽりと覆いつくすカチョーの手……手……大きいデスネ……

カチョーはペンを置き、「ああ」と、何か思い出したかのように言う。

「季節ごとにそれぞれ二十セット用意を。着まわし例を写真に撮ってファイリングして、それに合うバッグ、靴、装飾品も揃えてくれ」

「はい。それではこちらのショルダーバッグとハンドバッグを主として、ご旅行に行かれるようでしたらボストンバッグ、スーツケースも追加いたします。国内外ブランド問わず、ということでよろしいでしょうか」

「それでいい」

「かしこまりました。後ほどお届けにあがります」

――へ？　ど、どういうこと？　私の理解力では追いつきません。

「他にも何かいるか？」

「いいぃぃいらないデス！　これ以上買ったら、体で払――ぎゃっ！」

「人聞き悪いこと言うな、阿呆！」

でもでも、どういうことなの？　はっ！　こういう時こそ現実逃避デス！

――執事の胸に禁断の欲望が渦巻いていた。

主人にこのような思慕を持つことは許されない。しかも主は男で、執事である自分も男だ。同性であるが故に越えられない壁がある。主の女性遍歴はずっとこの目で見てきているから、好みのタイプは熟知している。しかし――今、目の前にいる主人の無防備な寝顔に、とうとう……

ごりごりごりごり。
「あだだだだだだだだだっ！」
「帰るぞ」
カ、カチョーッ！　グーの関節部分で頭をゴリゴリやらないでくだサイッ！　見た目は地味だけど、痛みはハンパねえですから！
ししししかしカチョー……
「あ、あのカチョー？　この……手は……？」
「繋いでいるが、それがどうした」
どうした、って、どうしたもこうしたもないデスヨッ！
カチョーサマは放す気サラサラなさそうに見える。
もうワタクシめは疲れてしまい、文句を言う元気も失せ、カチョーのおっきな手に繋がれたまま黙って歩きますデス。しっかし、ヒールのある靴など普段はまったく履きませんから、六センチといえども中ボス級にやっかいですな。生まれたての小鹿ばりにヨタヨタと歩いていると、カチョーが急に立ち止まり。そして歩きやすいように気を遣ってくれたのか、手を放してくれた、と思ったら……
「しっかり掴まれよ」
カチョーと腕を組まされました！　ちょ、待て待て、これはアレだろ、これではラブ

なカポーが周りのみんなに見せつけるように市中を練り歩く構図だろぉぉ！　無理無理、あたしゃ言うなれば、専属メイド、従業員っすよ!?　ご主人様お止めくだせえっっ！
「ご主人様か――それも悪くない」
ぎゃあああっ！　うっかり口に出してマシターー！
カチョーサマはニヤリと口の端を歪め、暗黒のドS笑顔で私の手をガッチリと挟み、逃げられないようにしながら私を連行しました……

白亜の城（私にはそう見えマス）に戻り、やれやれと履きなれないパンプスを脱ぎ、玄関のたたきの端に寄せる。……ってさ、おっかしーな。フツーは玄関って、もうちょい砂とか埃とか端っこに溜まってませんか？
「何をしている、早く入れ」
「はっ、はひーっ！」
玄関から真っ直ぐに伸びる廊下。その途中に、二階へと続く階段がある。さっきはすぐに二階に上がったため、まだ他の部屋は見ていないのデス。
カチョーに続いて私がリビングへ入ると――
「か、かちょお……？」
「なんだ」

「あの……」
あまりの光景に絶句デスヨッ！
「あのぉ……汚部屋はいずこ……デスカ……」
ニュース番組などでたまに取り上げられるゴミ屋敷的な、そんなイメージを持ってましたが……っ！
「カチョーッ！　私はどんな家事をすればっっ!?」
そう、この部屋には、何もない。テレビ？　ノー！　カーペット？　ノー！　生活臭？　ノーォォォォッ!!　なーんにーもなーーいっ！　辛うじてあるのはカーテンとソファとリビングテーブル。
まあ待て。ちょっと待て。一回深呼吸だよ私。一回目を閉じてみればいいじゃなーい？　見間違いかもしれなくってよっ!?
スーーーーッ……ハーーーーーーッ。よし！
「……変わりません」
「何やってるんだ」
「いえ、ファンタジーはやっぱり二次元の世界にだけあるんだな、と自覚したところデス」
「意味がわからん」
「わからなくていいんです。ところでワタクシめは、この家で一体何をすればいいので

すか？　こんなステキハウスに掃除が必要だとは思えませんデスけど」
ここに人が住んでいるとは思えないほどキレイ。モデルハウスのほうがよっぽど生活感があるくらい。そんな疑問満載な私の手に、ポンと財布が置かれた。
「明日からしてもらうことを言う。家具や生活用具をこれで揃えてくれ」
「……へ？」
「できるだけ家庭的な雰囲気を出すように。それから掃除、洗濯、料理を任せる」
「……なっ？」
「明日は日曜だが、私はどうしてもやらねばならない仕事が入った。朝はいつも食べないから要らないが、夕飯を楽しみにしている」
なんてこったぁぁ！　カチョー！　いち、いちから家具を揃えろとぉぉっ!?　ああ、でもそれはひとまず措(お)いておこう。私にはどうしても確認しなければならないことが一つある。
「かちょお？」
「なんだ」
「あの、ワタクシはメイド服を着たほうがよろしいデスカ？」
バチコーン！
「ギャッ！」

カチョーのデコピン、クリティカルヒット!!
「阿呆！　普通の格好でいい、普通で！」
そしてカチョーは風呂に入ると言い、着替えの服を取りにサッサと二階へ上がってしまった。
うわーん！　ほんの出来心だったのにっ！　家事といえばメイド、メイドといえばコスプレ！　だから漫画の資料用に買ったメイド服を持ち込んだのになー。
つまり……
「ご、ご主人様っ！　僕は男です！」
「それは知っているが、何か問題でも？」
「大アリですって！」
「ほう……その割には」
「わわっ、ダ、ダメですって！」
……
パカーーーン！
「カチョーーォォッ！　スリッパで叩くのは反則デスーッッ!!」

いつの間にかリビングへ戻ってきたカチョーに、スリッパで叩かれました……。あったんだ、スリッパ――って、なんで私が妄想してるタイミングがわかるかなっ!?　カチョーの妄想キャッチセンサーはかなり感度がいいですね！
「風呂はあとで適当に入れ。明日は午前中にデパートから荷物が届く。頼んだぞ」
「りょーかいしまシタ……」
私はノロノロと二階に上がり、あてがわれた部屋に入りました。そして日中書き損ねた妄想シチュをメモろうと手帳を取り出したまでは覚えてますが、あまりに疲れていたので、そのまま夢の世界へと旅立ちマシタ……

3

「……んー、今なんじぃ……？」
翌朝、日曜日。布団の中から腕を伸ばし、頭上に置いてあるはずの目覚まし時計を手探りした。
ん？　ん？　アリマセンね――ってぇっ！
ばっさーっ、と掛け布団を蹴り上げ、飛び起きた私は……

「え、まさか異世界？」

とりあえず異世界トリップにありがちなテンプレを呟いてみた。

まさに見覚えのない部屋――って、あれ？　ぐるーりと見渡せば、見覚えのあるスーツケースが。

ああ……カチョーの城か、ここ。なんだまだ朝早いじゃん――ってぇぇっ!!（二度目）

サスガに目が覚めましたよっ、なんてこったぁっ！　私、昨日の夜はそのまま寝ちゃったにょぉっ！　手帳にネタを書こうと思ったところまでは覚えている。ええ、覚えていますよ？　でも、たしか床の上で行き倒れてしまったはず。今いる、今座っているこの場所は、お・ふ・と・ん。ナンデデショーカ。

訳わかんないことが、もう一つ。私……なんで……なんで……

「ぱーーーーじゃーーーーまーーーーぁぁぁ！」

肌触りの恐ろしく良い、上質の生地で作られたパジャマですっ！　ちょ、なんで私がコレ着てるんでしょうかっ!?

しばし呆然としていたら、ノックの音と同時に（同時に！）ドアが開いた。ちょっと！ノックする意味、ないじゃないですか！

「朝からうるさいぞ」

「かちょぉぉぉっ！　あのっ、私の現在の状況は一体ナンでしょうか」

「……寝て起きたところだな」

「見たままーーっ！」

ぎゃふんとひっくり返りそうになりましたよっ。

カ、カチョーめ、Tシャツにジャージズボン穿いて、うっすら生えたおヒゲらしきモノをなぞるんじゃありませンッ！　ずるいぜ、萌えるぜ、コンチクショー！

「私はどうして布団の中に？　それに、何故パジャマを着てるんですか？」

「さあな」

ソコ答えてーーーーーっ！

私はカチョーに何度も問うてみたのですが、その都度華麗にスルーされました。――限りなく「着せられた」可能性が高いのですが。高いのですが。いやっ、しかしっ！でもデスヨ？　私に記憶がないだけで、寝ぼけながらも何らかの方法で着替えたという可能性も無きにしもあらず！　うん、よし、じゃあその方向で、その方向でーぇぇぇ……納得しておきましょう。

洗面所で身支度をし、使い慣れないクラゲちゃんを目に入れて（というか、これも外してアリマシタ……謎だ）リビングへと足を踏み入れれば、コーヒーの香りがふわんと漂っています。

「飲むか？　カップはこれ一つしかないが」

「……えーえー。何もないのは存じ上げておりますからね。じゃ、イタダキマス」
家電など何も見当たらないくせに、ご立派なコーヒーメーカーだけはあるんですね。やたらいい香りがするんで、私も一杯いただきました。あー、美味しい。
「カチョー、食べないんですか？　今日は休日出勤だと聞きましたが……」
「朝は食欲がない」
「私はガッツリ派なんですけどね……」
Yシャツにネクタイを結んでいるカチョーを眺めつつ、こんなレアな光景を独り占めできるなんてウホホだわ、と密かにほくそ笑みながら冷蔵庫を開けた。昨日の帰りしなに買っておいたおにぎりを二つ取り出し、ペリペリと包装を剥がす。食べるものはこれだけ。だって鍋すらないから、何も作れませンッ。（涙）
リビングテーブルの前で正座をして、ぱちんと手を合わせて、いただきますのご挨拶。さーて食べようかと一つ手に取り、あーんと口を開けたら……
「うまそうだな」
「かちょおーぉぉっ！」
カチョー殿は私の手ごと掴んで、おにぎりを自らの口へ運んだ。それはそれは気持ちがいいほどの食べっぷりで、おにぎりはわずか数口でカチョーのお腹に収まってしまいました。しかも最後に私の指に付いたご飯粒まで、唇で綺麗にぬぐい取ったのデス。

「じゃあ行って来る」
カチョーは私の頬をさっと撫で、ご出勤なさいました。私の口は、酸素不足の金魚のようにパクパクするばかりで、抗議の一つもできなかったデス。

くっ、カチョーめぇ！　なんつーオッソロシーことしやがりますかっ！
私は只今、妄想の限りをメモすべく、机に向かってガシガシと書き連ねておりマス。昨日から現在までの妄想回数は約二十回。私の妄想力を舐めんなデスヨッ！
さっきのカチョーの唇の感触も忘れないうちに記しておこう……私の指に触れたクチビルの感触……

彼は僕の手首を押さえたまま、僕の人差し指と親指についた米粒を一粒ずつ、その少し薄い唇で食（は）んでいった。
うっすら開いた唇が僕の皮膚の上を滑り、そこかしこに散らばっている小さな米粒を捕まえていく。その度に熱い吐息が指にかかり、僕はたまらなくドキドキしてしまった。
――指が熱い。しかし、熱をもったのは指だけではない。
激しく自己主張を始めた自らを、彼に気づかれないよう……

「だーーーーーーーーーーーーっっ!!」

駄目デスっ！

「私」を「僕」に変換してみましたが、どうにもこうにも私の指に触れるカチョーの唇、そして私をじっと見つめるその視線がまったくもって頭から離れませンッ!! ヤメたヤメたっ！ よし、後で書き直そう！ とにかく今日やるべきことは……荷物を受け取りーの、家具と生活用品を買い揃えーのデスね？ よしここは一つ、腐女友にヘルプしてもらおう！

私には、インテリアコーディネーターを生業とする腐女子友達がいる。ええ、腐女子は腐った部分を巧く隠して社会に生息しているものですからね！ 彼女は中学校以来のツレなんですけどね、まあなんだ、見た目と肩書きに騙されんなよオマエラ！ っていうのはこいつのためにある言葉だと思います。そもそもこの友とは——以下略。

彼女に連絡をすると、たまたま近くにいるとのことで、すぐにやって来てくれて、部屋の採寸をして帰って行きました。

『ちょこれいとnight』という、プレミア付きのBL同人誌と引き換えでしたが、背に腹は変えられませンッ！ 仕事の鬼である彼女ならば、できるだけ家庭的なイメージに、という要望通りのものが今日明日中にすべて揃うことでしょう。持つべきものは友です

なっ！

そうこうしているうちにデパートの執事（仮）がやって来て、山のような荷物を搬入ぅ！ ……全部、私の服やバッグや靴やアクセサリー。これまでずっと考えないようにしてきましたが、このお代金てどうなのさ。私の一ヶ月分の給料じゃ明らかに足りないんですけど……。でも流石にそれはカチョーも御存知でしょーから、帰ったらきちんと聞いて確かめねばなりません。でもまあ今はとにかく片付けなければ！ 急げぇぇっ！

その日の夜。

「あ、カチョー。お帰りなさい」

「……」

「ご飯にしマスか？ お風呂にしマスか？ それともワ・タ——」

「……風呂。それから、その服は着替えて来い」

私がメイド服を着て玄関で迎えると、カチョーはネクタイを緩めながら風呂場へ直行しました。なるほどなるほど、外出から戻ったら風呂へ直行するタイプなんですね。メモメモっと。

ふふーん、カチョーの態度は想定の範囲内です。気分を盛り上げるために着ただけなので、サクッと着替えまーす！

夕食は、実家の母に聞いて献立を考えました。
『研修合宿なのに食事は出ないの？』
「え、あ、あの、料理は当番制で！　で、いつもおかーさんが作るアレの分量を教えて！　あと、隠し味って何？」
『うーん。私もお隣のおばさまから教わったんだけど、それを教えるわ』
「わーい、ありがと！」
『ちょっと甘めにするのがコツで――』
そうしてでき上がったのがコチラ。
「親子丼、大根の味噌汁、ワカメとキュウリの酢の物、舞茸と大根の煮付け、か？」
「すみません、今私が食べたい物でして。あと、家族以外のために作るのは初めてなんですけど……」
味とか大丈夫ですか？　と聞こうとしたら、アララなんでしょう、カチョーの目元が緩んでます？
「俺の好物ばかりだ。――うん、美味い」
「ふぉっ、ありがとうございマスッ！」
褒められて、なんだかめちゃくちゃ嬉しくて、「ひゃっほう！」と叫びたくなりました、

というか叫びました。私が作った物を食べてくれて、褒めてくれるなんて、嬉しいことこの上ないですね。よし、メモろう！　このシチュを、次回『ＢＡＲＡ☆たいむ』に投稿する際に使おうと、私は心に固く誓いました。

「おはよーございマスッ！」
「ああ、おはよう」
本日は月曜日、出勤日でございます。
朝は炊きたてご飯と、昨日多めに作っておいた味噌汁の残り、塩もみキュウリ、サンマのみりん干し。焼くだけなので簡単です。実家でよく食べる献立を参考に、朝食を整えました。
「この味噌汁、いい味がする」
「ダシ入り味噌を使っているんですけど、仕上げに鰹節の削り粉を少し入れると、風味が良くなるんですよ。実家ではいつもそうしてます」
「そうか。それにしても――残さずきれいに食べるな」
「ハイ！　残すのが嫌なんデス！」
両親にそう躾られたのですよ。おもてなしを受けたのにそれを蔑ろにするのは大変失礼なことであると。アレルギーでもない限り、苦手な食材もありがたく頂きなさい、

と――

私の実家があるド田舎では、隣近所と頻繁に行き来をし、お呼ばれする機会も多く、他家の冠婚葬祭に関わりを持つことだってあります。そんな土地に嫁いだ母は、ここで生まれ育った人みたいに馴染みきっていたけれど、実はヨソから来たんです。それだけに、人づきあいのマナーには人一倍の注意を払っていたようです。

なので私も小さい頃から、出された物はキチンと食べきる。たとえ苦手なシイタケのすまし汁が出たとしても残しませんよ！（涙）

「そうか。いい主義だな」

「はいっ！　あ、カチョーだって私の料理を綺麗に食べて下さるじゃないですか」

カチョーはご飯粒一つ残さず平らげてくれる。それを見るとメッチャ嬉しいし、喜んで食べてくれる姿を想像しながら料理をするのは張り合いがあります！

「お前の作る料理は美味い」

カチョー、そうやってふわんと目元を緩めるのは反則デスヨ？　カチョーは味噌汁のお椀をゆっくりと置き、どこか遠くを見るような目をしている。ううむ、一体何を考えているのでしょーか？　あっ！　ひょっとして、昔の男と逃げたとかいう噂の奥様のこと？　前の奥様のことでも思い出しましたかっ!?　さっき、「お前の」って言いましたもんね！　ということは、前妻の作ったお料理は……

「そうだ、言い忘れていたが……」

「えっ？　あっ、ハイッ！」

「今日の服は八番でいけ」

「……ナンデスト？」

「じゃあ先に行く。ちゃんと戸締りをして行けよ」

カチョーはお茶をゴクリと飲み干し、先に出発してしまった。

八番……八番……はっ！　まさかあのステキ衣装ファイルに収められている、コーディネート番号八のことでしょうかっ！　いつそのファイル調べたよ！

今の私の姿は、エプロンを外せばいつものスーツ。超無難なこの服装……気に食わないのデスカ、カチョー殿。

朝食の後片付けを終え、二階の部屋のクローゼットを開ける。何度開けても、慣れませんね……。デパートメントゥで購入したステキ女子服が、ずらりと並んでおりマス。目がチカチカいたしますデスヨッ！

衣装ファイルを開き、ずらりと写真が並ぶ中、八と書かれたページを開く。そこには『キラリ☆風がそよぐ春色コーデ』と書いた付箋（ふせん）が貼られている。薄いピンク色のニットにふんわりしたタックスカート、それに白のスプリングコート。ベージュのストッキングは少し柄が入ったものが必須！　と注釈まで付いて……バッグもパンプスも指定ア

リ。どんだけ丁寧なんだよ！　書いたのはあのアマゾネスかっ！　どんだけファンシーな世界をさまよってるんだ！　戻ってこーいっ！

さて。なんだかんだと文句を言いつつも、ちゃんと指定通りにフルモデルチェンジしたこの姿……出勤するのがちょっと躊躇われマス……上司や先輩、同僚のみんなになんて言われることやら。

「わっ！　ユリ子ちゃん……だよね？　どしたの」

ぎゃっ！　さすがマメ橋センパイっスね！　早速見つかっちゃったＹＯ！

私はコッソリと社内に入り、マイ机に向かってとにかく静かに静かにしていたが、マメさが売りのマメ橋、もとい高橋センパイに早速声をかけられてしまった。

「ごごごごめんなさいっ！　ほんの出来心でっ！」

「何言ってるの。違うよ、すっげー可愛くなってる！　あ、みんなー、こっち来て」

そう言って、マメ橋センパイはフロアにいるオネエサマ達を呼び集めた。

「え、誰？　――ユリ子ちゃん？」

「どうしたの？　イメチェン？」

「可愛い、可愛い！」

綺麗なおねーさま達が、ワタクシめをぎゅうっと抱き締めて頬ずりなさいマス。ちょ、

ね、待って、おねーたま！　私はそんな趣味ないけど、どうにかなりそう……いいカホリがしマス……むっはー！　近づくだけで欲情モノですヨッ！　おおぉぉやーらかいっ!!　きゅうっと抱かれるこの感触……女子、やーらかい……ウットリ。

「おい、始業時間だぞ。仕事にかかれ」

私達が輪になってキャアキャアやっているうしろから声がかかったのですが……

ぎ、ぎゃあああっ！　かちょぉぉぉっ!!

――って、あれ？　カチョーは何故か私をスルーし、普段通りの「カチョー」な顔して自分の机に向かって行きます。あれ……あれれ？　今日はデコピンとかゴリゴリ攻撃はないのデスね。

カチョーに一喝（いっかつ）され、みんなそれぞれ仕事に向かいました。それは、何ら変わりない日常の光景。

だけどカチョーの妄想キャッチセンサーが反応しなかったので、私はなんとなく物足りなさを感じてしまいました。

仕事を終え、先に帰宅した私がお出迎えをすれば、そこにいるのはいつものカチョーだった。

ただし、冗談で身に着けたブリブリエプロンはそのままでと指令を残して、お風呂場

に直行。むうう、謎のオヒトです。ではカチョーが風呂に入っている間に、料理を温めなおしましょー。

今夜はご飯、ジャガイモと玉葱の味噌汁、小松菜と油揚げの煮びたし、大根と手羽先の煮物、冷やしトマト。オサレな料理はよくわかりませんので、私が食べたいものを作るだけです。実家のママンがよく作る料理、家を離れると食べたくなるモノです。

カチョーが風呂から上がるタイミングに合わせてご飯や味噌汁をよそい、一緒に席についてイタダキマスをする。そしたらカチョーは、箸を持ちながら私に聞いてきた。

「……まだ食べてなかったのか？　待たなくてもいいんだぞ」

「いえ、一人で食べるのが嫌なだけですから。実家ではいつもみんな揃って『イタダキマス』をしていたので、なんとなく私もそういうクセがついたというか……だから気にしないで下さい」

それに、一緒に食べれば洗う手間も一回で済みますからねっ！　そう言って大根に箸を伸ばした。うむ、我ながら上手くできました。煮込む時間が充分あったからね。おっけーおっけー！

もぐもぐと口を動かしながらカチョーに大根を勧めようと思ったら、カチョーは私を見つめ……見つめてましたっ！　あれデスよー凶器デスよーっ！　とてもこう、なんか妙にモゾモゾと居心地が悪くなるんだいっ！

――はっ！　まさかこれって……ツンデレ要素ですかっ!?　うわーやばい、会社での妙に冷たい態度も、きっとツンの部分に違いないデスッ！　くうっ、やるなあカチョー、この私にリアル体験させてくれるとは。「ツンデレ」の極意、しかと受け止めまし――

ぎゅむーーっ。

「ふがーーっ！」

「現実に戻れ」

「はがっ！（鼻！）　はがっ！（鼻！）」

4

そんなこんなはアリマシタが、その後はつつがなく（？）、約一週間が過ぎ、ツンデレカチョーにも少しだけ慣れ――

いや、慣れないデスね！　まったく慣れないデス。慣れる日なんて来るのでしょうか。

今日も今日とて会社帰りのカチョーをお出迎えです。

「お帰りなさいませ、ご主人サマ」

「……どうした」

どうしたというか、どうせならこの生活を楽しもうと思ったのデス。『三つ指ついてお出迎え！　亭主関白な夫を迎える新婚妻♪初級編』というコンセプトですので、ブリブリエプロンも着けて玄関で正座してお帰りなさいのご挨拶デス！

カチョーは玄関のドアを閉めることすら忘れたように、しばし呆然としたまま私を見てましたが、そんなことは気にせず、次のテンプレをば……

「えーと何でしたっけ？　あ、そうそう！　『お食事になさいますか？　お風呂になさいますか？　それとも、ワ・タ……』」

「風呂だ」

カチョーは私の言葉を途中で遮り、ダンダンッと足音を立てながら風呂場に直行っ！

えー、えぇーー！　最後まで言わせてくだサイーーッ！

エプロンのポケットからメモ帳を取り出す私。ここにカチョーの生態記録を書き込むのデス！「カチョーは話を最後まで聞かずに風呂場に行った」とメモメモ。

では次……食事の用意です。今夜は豚の冷しゃぶと、ナスとジャコとシシトウの煮物、ゴボウと人参のキンピラです。作りたてじゃなくても大丈夫な献立ばかり用意しました！　それは何故かというと……

ノ・ゾ・キ。

キャー！　何てことをーーっ!!　いやいやいやいやっ！　そりゃー私もね、イケナ

イことだとは重々承知。しかしデス。しかーしっ！　一つ屋根の下、期間限定とはいえ、かっちょいー男性と同居生活。これはある意味ね、チャーンス☆なわけデスヨッ！　私ってば……生身の男性をよく知りませんカラー！　カラー！　カラー！（エコー）

決して威張れることではありませんが、彼氏いない歴二十二年の身でＢＬを描いても、つまりそういう場面をうまいこと想像できないのですよね！　そんな訳で、ワタクシの描くＢＬは、アレなしの朝チュンレベル。ま、まあそれでも私は充分満足してはいますがねっ！

しかし……カチョーのなら見てみたい。うん、カチョーのならアリですっ！　どうしてそう思えるのかはまったくワカリマセンが、清水センパイでもマメ橋センパイでもなく、カチョーのはナマで見てみたい……っ！

抜き足差し足忍び足……シャワーの音が聞こえるこちら、洗面所前デース。

ふふん、カチョーは何も気づかず体を洗っていらっしゃる！　私は正統派の覗き魔として、音も立てずに洗面所の引き戸をススッと開けた。

風呂場の扉は、中にいる人のシルエットがうっすらわかる程度のくもりタイプの樹脂パネル。チェック済みデス！　扉の下部には、覗き穴ともなりうる換気口があるのを。そこからコッソリと覗いてみようと思いむわっす！

両膝をつき、顔を床にこすりつけるようにして、換気口を覗こうとしたその時――
「土下座レベルのヘマでもしでかたのか」
「で、でたーーーーーーーーっ!!」
いきなり扉が開き、カチョーが顔を出した。
ぎゃっ！　ヤヤヤ、ヤバイ！　ヤバイデスヨー！　カチョーの顔に目線を合わせたのはいいけれど、ここで視線を下げたりしたら、モロですよね……モロ見え……絶対ヤバシ！　うむ、ここは一つ腹を括って！
「カチョー！」
「なんだ」
ごくり、と唾を呑み込んだら喉が鳴ってしまいました。びしょびしょに濡れたカチョーの髪が、なんとも淫靡な雰囲気を醸し出し、より一層ハァハァものデス!!　よし、言うぞ！
「裸見せて下サイ！」
「いいぞ」
ほらやっぱりダメですよね、すぐ断ると思ってた……って！　チョチョチョイ待ってー待ってー!!　おっけーなのデスカーッ!?　大パニックな私があわあわしているうちに扉が全開になり……

「ぎゃーーーー！　やっぱり無理ーいぃ!!」
目をギュッと瞑ったまま立ち上がり、逃げようと身を翻したら――
ゴッチーーーーン！
そこに壁がありました……

パチッと目を開くと、あたりは薄暗く、天井らしきものが見え……えー、私寝てました？　仰向けの姿勢でぼーっとしたままそちらに顔を向けると、カチョーが私の枕元で胡坐をかいていました。
「痛みはどうだ」
「――ありましぇん、かちょぉ」
ああそうだ。私ってば、洗面所で壁に激突したんですね！　オデコに手をやると、そこにはヒンヤリとしたタオルが当てられていました。
「触るな。中身を取り替えてやる」
カチョーは私のオデコに乗せていたものを取り上げ、何やらガサガサやっている。ちょ、ねえナンデスカこれ。
待ってー！　カチョー、氷をレジ袋へダイレクトにインしてますよ！（私、英語デキマス！）……大胆デスね。いや、だけどカチョーが熱さまし冷却シートを持っている

とも思えないし、ある意味、臨機応変に対応したすぐれた処方と言うべきなのでしょーか。
「イタタタタタッ！　カチョー、オデコ撫でないでぇぇっ！」
「こら動くな。たんこぶは冷やすのが一番なんだぞ……ククッ」
レジ袋の氷を入れ替えてタオルで巻き、私のオデコにそっと乗せたカチョーは、たんこぶを見て小さく笑った。ちょ、待って、どんだけ大きなタンコブなわけですかっ!?
「カチョー！」
「なんだ」
「そもそもカチョーが見てもいいって言ったのが悪いのデスッ！」
「そもそも、か。では、そもそも洗面所に入ってきた理由は？　土下座ポーズをしていた理由は？　それから裸を見せろと言ったのは誰だ？　――そもそもお前がこの家にいる理由は何だったか、思い出せ」
「ギャー！　カチョーの俺様ドS！　コンチクショー！　だからごめんなさーい！」
ガバッと布団を被り、サナギに変身デス！　ああもう絶対に敵うわけないのデスよ、カチョーめ！　……ってぇ！　わあああああっ!!
「カチョー！」
今度はガバッと勢いよく布団をめくり、上体を起こした。オデコに乗っている冷たいものは左手で押さえてありまっす！

「なんだ」
「なんで私、パジャマ着てるんデスか!?」
「布団に入る時はパジャマを着るものだからな」
「ちっがーーーーーーーーーーーうっ！」
私はバンバンと布団を叩きながら猛抗議デス！　大体これで何度目でしょーか！　この一週間の間も寝オチしていたことが二度ほどありまして、やっぱり変身してました！
「問題はそこじゃねぇですよっ！　毎回不思議に思って、っていうか、すぐ忘れる私も悪いのですがっ！　今日という今日は言わせてイタダキマス！」
「……ハイハイ」
うわー！　明らかに返事適当ーーっっ！　もうこうなったら、とことんわからせてやらねばならんのですよっ！　私は身を乗り出し、カチョーに迫った。コンタクトも外されていて、視界がぼやけていますからね！　臆せず目と目を合わせて、言い聞かせてやりましょう！
「カチョー！　しっかりと私の目を見て下さい！」
「……」
「目を逸らしちゃダメですっ。私がいつの間にかパジャマに着替えてるのはどうしてなのか、教えて下さいっ！」

「仕様だ」
「意味わかんないデスヨ！」
「教えられるか、阿呆」
「ふぉ……？」
ナニ――ナニコレ。
まず感じたのは柔らかさ。そして次にやってきたのは温かさ。
私の視界一杯に広がるカチョーの顔。近い近い近い！　って、近いどころか、唇、触れてます！　ナニナニナニナニ!?　ちょちょちょちょちょ!?
大パニックの私からそっと顔を離し、ほっぺたをひと撫でしたカチョーは、「堪えられなかった、すまん」と言い残して部屋を出て行った。
な……何が起こったの！　ねえちょっと誰か！　誰か私に教えてぇえっ！　思考停止デスッ!!

5

かんっぜんに眠れませんデシタ……悶々としたまま、夜を明かした私。

昨晩のカチョーのあの所業。うう、あれは一体どういう意図があってなされたものなのか。
はっ、そうだ！　こんな時、乙ゲー（乙女用恋愛ゲームの略デス！）マスターの「リーダー」ならばきっと、良きアドバイスをして下さるに違いありましぇんっ!!
リーダーとは、私が所属するサークル『ＢＡＲＡ☆たいむ』の主催者で、ペンネームは「愁堂芙妃都」。二十九歳、独身、女性。
リアル世界での彼女は、さる大病院の受付嬢であり、『腐女子』というのがありえないほどの超絶美人なのです。モテモテなので、腐に走っているなんて言っても誰も信じません！　美人ってお得デスねー。
ともあれ、リーダーなら今この時間も絶対に起きてます。彼女は実家暮らしで、家族に邪魔されずに萌え萌えするために、休日は完徹でゲームをやるというライフスタイルなのです。さ、メールをポチポチ押して、いざ送信！
ブホー、ブホー、ブホー……
早っ！　返信早っ！　マナーモードにしていた私の携帯が、ブルブル震えてメール着信を知らせる。ぽちっと開封すれば……
『至急　ファミレス　集合』
決断早ーっ！　はっ！　ソッコー行かねば酷い目に遭うですよ！　まだ寝ているであ

ろうカチョーを起こしてしまっては申し訳ないので、静かに身支度を整え、そっと玄関を出ました。

「……おっどろいた！　りりぃたん、いつからそんなメタモルったの？」

早朝のファミレス。リーダーのぽかんと開いた口から発せられた第一声がこれです。

メタモルったというのは、つまりメタモルフォーゼした、要するに変身したっていう意味の仲間内での略語です。そして、りりぃたん、というのは私のＰＮで、『ばらメーカーりりぃ♪』の「りりぃ」。薔薇を作るユリ子、のコトです！

ちなみに、この時の私のファッションは、これまたご丁寧にファイルにまとめられていた番号三の、『新緑がヤキモチ焼くほど☆アナタにゾッコン』……というコメント付きのコーディネートでした。

なんだよ、ヤキモチ焼くのかよ新緑が！　とウッカリ突っ込んでしまいましたが、毎度このようなコメントに心揺さぶられているようでは、何となく負けた気がして面白くないです。

「で、何があったわけ？　ほら、早く言いなさい！」

リーダーは、寝不足ゆえに充血したギラギラした目で、ずいいーっと身を乗り出してきた。ひいぃっとのけぞりつつも、昨晩我が身に起こった出来事をダイジェスト版で語

立ち読みサンプルはここまで

ります。

「ふぅん？　それは美味しいシチュね。ふっふふっふふふふ……」

キャーー！　リーダーの妄想魂に火がついたぁぁぁぁーー！

ガクブルしながら、紅茶を飲み込む。コーヒーではなく紅茶にしたのは、カチョーが毎朝淹れてくれるコーヒーの味に慣れてしまい、外で飲むコーヒーは美味しく感じられなくなってしまったから。

だけどリーダー、その手元スンゲー怖いですからっ！　何というか……あれだ、自動書記をするアッチの人みたいに、ノートを見もしないでメモをとる姿……かなり殺気立ってます。

私の話を一通りメモし終えたリーダーは、ガシリと私の手を握る。

「なんて素晴らしい環境にいるの、りりぃたん！　それはぜひとも観察日記をつけるべきよ。で、私に定期報告すること。ふふっ、体を張ってまで、わざわざこういう展開にもっていくとは……っ！」

「観察日記ってナニ！　ていうかカラダ張っていませんし、わざわざ展開なんてできましぇーーん！」

カチョーが何故あんな行動をとったのか、二次元世界でも三次元世界でもモテモテで恋多きリーダーに、ぜひとも解説してもらいたかったんですけど！　ふて腐れる私を尻